

海砂採取後海域の海底環境変化 愛媛県大三島南方海域

Bottom environmental changes at sand dredged area an example -at the south of Ohmishima Island, Ehime prefecture-

井手 直道 [1]; 井内 美郎 [2]; 天野 敦子 [3]; 中西 俊貴 [4]

Naomichi Ide[1]; Yoshio Inouchi[2]; Atsuko Amano[3]; Toshiki Nakanishi[4]

[1] 早稲田大・人間科学部; [2] 早大 人間科学部; [3] 愛大沿岸センター; [4] 早大 人科科学部

[1] Human Sci, Waseda Univ.; [2] Human, Waseda Univ.; [3] CMES, Ehime Univ.; [4] Human Sciences, Waseda Univ.

瀬戸内海では1960年代以降海砂採取が活発に行われてきた。

今回報告する愛媛県北部大三島南方海域もその一つで、瀬戸内海では最後まで海砂採取が続けられてきた海域である。一般に、海砂採取がおこなわれた海域では、砂堆という砂の小山が消失し、底質も礫化するなど水産資源に対する大きな影響が報告されている。海砂採取が終了した海域はそのまま放置され、海底環境は破壊されたままである例が多い。一方、砂堆地形の回復は望めないものの底質の回復が始まっているという報告もある。

底質環境の回復過程を明らかにする目的で、大三島南方海域において継続的な地形・底質調査を実施している。なお、この海域では、2006年4月以降海砂採取が禁止されている。

2003年に実施した底質調査の結果と比較する目的でほぼ同一地点で採泥調査を実施した。その結果、調査海域のうち海砂採取がおこなわれてきたと推定される海域で底質の粗粒化とその周囲の海域で細粒化が観測された。この結果は、2003年以降2006年までに実施された海砂採取の影響と推定される。